

# 大朝日岳・大沼と出雲王国

●『三大実録』には「出羽国の白盤神と須波神に従五位下を授けた」とあり、須波神は朝日岳のことで龍蛇神の諏訪神とされる。たしか山形市の鳥海月山両所宮に伝わる見解だったと何かで読んだ気がする。たしかに朝日岳は諏訪と同じ龍神の山だと伝わっているからそうだろうと思っていた。

それに、伊勢志摩の多くの神社からの祭祀線は諏訪湖周辺の神社を通して大朝日岳や大沼浮島、早池峰山につながっていることがわかっている。単純に伊勢志摩から見て諏訪湖の先にあるから大朝日岳の神は諏訪神なのだろうと思っていた。詳しくは「伊勢・志摩の神々の祀られ方」のページを参照いただきたい。（詳細地図ソフトを使えるようになってから未確認なのでアバウトなラインもあることをお含みおきいただきたい）

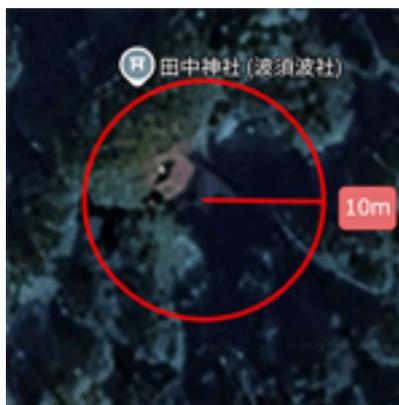


●さて、須波神＝諏訪神の考え方に異を唱えられるか、あるいはかえって肯定できるか。NHKの朝ドラ「ばけばけ」も話題となり、いよいよ出雲と出雲王国最北端の聖地大朝日岳とのつながりを探してみようと気持ち上がり探してみた。すると、いきなり驚く祭祀線が見つかった！



■田中神社（波須波社） ←←← 大朝日岳山頂 ←←← 大沼浮島出島

●田中神社の位置は、まず地理院地図（左）にポイントを置いて、そのまま写真地図（右）に切り替えて特定した。うっすら黒い本殿屋根が見える。※ メートル数は関係ない



### ■田中神社（波須波社）

田中神社（たなかじんじゃ）は 社伝によると 13世紀に京都の吉田神社から勧請したともいわれ 江戸時代には「田中明神」とも呼ばれました 『出雲國風土記 733 AD.』所載の 神門郡 不在神祇官社「波須波社（はすは）のやしろ」の論社です。

祭神《主》天穗日子命、猿田彦神



『出雲國風土記 733 AD.』所載の 神門郡 不在神祇官社「波須波社（はすは）のやしろ」の論社はニヶ所です。波須波神社（出雲市佐田町下橋波）、田中神社（出雲市佐田町吉野）

『雲陽志（unyo shi）1835AD.』神門郡 吉野 にある伝承

本書の下橋波（しもはしなみ）の条には 『出雲國風土記 733 AD.』所載「波須波社（はすはのやしろ）は 下橋波の「田中明神〈現 波須波神社（佐田町下橋波）〉」と記しています

ここ吉野の条には 「橋波村（はしなみむら）須波神社（すわじんじゃ）」から勧請したと記しています 勧請元は「田中明神〈現 波須波神社（佐田町下橋波）〉」とは別の神社でしょうか？

※以上、サイト Shrine-heritager 実践和學より抜粋

島根県出雲市佐田町吉野 324

### ■大朝日岳（朝日連峰・朝日岳）

磐梯朝日国立公園の朝日連峰主峰。五所神社縁起書によれば、天武天皇の治世、白鳳8年（7世紀末）、朝日嶽、岩上嶽（祝瓶山）に役行者が参籠修行し開山したという。『三大実録』には「出羽国の白盤神と須波神に従五位下を授けた」とあり、須波神は朝日岳のことで龍蛇神の諏訪神とされる。大円寺『朝日嶽縁起』（1505年）によると朝日嶽大富権現は、



大富権現・女躰権現・子守権現の三処であり、本地佛は、大富権現は弁財天（初頭神は大山祇神）、女躰権現は大日如来（木花咲耶姫命）、子守権現は正観音で大山祇神の娘溝織姫命であるとする。役の小角が出逢った女神は女躰権現。「朝日嶽信仰」は執権北条時頼（1246～56）によって千年封じされたまま現在に至る。

山形県西村山郡朝日町。

備考/朝日と名のつく場所は、太陽信仰の古代出雲族が朝日を遥拝した場所とされている。

三処とは大朝日岳、中岳、西朝日岳と推測される。

### ■大沼浮島（役の小角・弁財天）

湖畔にある大沼浮嶋稲荷神社（祭神/宇迦之御魂神）の神池とされ狐の形をしている。沼には大小の葦の島が風や流れに関係なく浮遊し、江戸時代には国の数32あり、その動きで吉凶を占っていたとされる。沼は白竜湖とも呼ばれ弁財天が祀られている。大円寺『朝日嶽縁起』（1505年）によると、朝日岳の麓に御手洗の「大富沼」があると記されている。

白鳳9年（681）役の小角が弟子の覚道を連れて出羽路に来た折、大谷川（朝日町大谷）のほとりで梵字が記された板碑が流れくるのを見つけ、川をさかのぼり、60余りの島が浮遊する神池大沼を見つけた。湖畔に浮島稲荷大明神を祀り、弟子覚道を別当（大行院）とし朝日岳修験が行われた。739年には行基が訪れ浮島66個に国の名前を付けた。建久4年（1193）には寒河江荘地頭となった大江広元の進言により源頼朝の祈願所になり、その後も大江家、徳川家、最上家にも祈願所として崇敬された。国指定名勝。

山形県西村山郡朝日町大沼

備考/浮島は、現在は数も減り、岸に付き動かないことが多いが、動く時は流れや風に関係なく意志があるかのように動き回り驚く。出雲族東王家の富家の人々は出雲から大和の葛城山東側に移り住んだとされる。役の小角の生誕地は奈良県御所市茅原。まさに葛木山の東に位置する。大沼を「大富沼」、大朝日岳の神を「大富権現（弁財天）」と名付けたのも役の小角だろう。役の小角が天孫族秦氏の稲荷神を祀ることはありえない。なにより伏見稲荷よりも古い歴史になってしまう。730年に「大沼社を南西の丘に移す」記述があるので、その時に秦族がやってきて主祭神を弁財天（瀬織津姫）から稲荷神に変えたのだと思われる。徐福が連れてきた海童たち秦族は蓬莱島信仰を持つ。自由に動き回る浮島は相当に魅力的だったはず。古い祭祀線はほとんどが稲荷神社ではなく大沼の鳥居の立つ「出島（弁天島）」（写真）が起点となっている。



●大沼から大朝日岳山頂を通過してそのままラインを西に伸ばしたら、島根県出雲市の「田中神社」にぶつかった。グーグルマップの表記は「田中神社（波須波社）」と書いてあって驚いた。波が一つ多いが須波が入っている。

●実は、少し前にリスペクトしている歴史家さんから、「朝日岳の須波神とは阿須波神のことではないか」と情報をいただいたばかりだった。違いは母音が同じ「阿（あ）」と「波（は）」。

●「阿」は、親しみを込めて呼ぶ際の接頭語という使い方もあるらしいので、まずは切り離して「須波神」と仮定して検索してみたら、岐阜県下呂市や、京都の上賀茂神社に須波神社があることがわかった。

## ■須波神社（すはじんじゃ）下呂市

通称 おすわさま お須波様

主祭神 建御名方命 事代主命

由緒

須波神社の創建年代は詳らかではない。往昔諏訪大明神と称し、貝洞の神田、現在の大字菅田桐洞字三度付近に祀られていたらしい。棟札や古文書等によれば、応仁元年切厚村（切洞村の元の名称）の氏神として、現在地に遷された。天文3年に、本殿を貝洞地区の人々が主催し建立してから、23年後の弘治3年に、その前方に拝殿を和田・前洞口・神田地区の人々が、協力して建立したものと思われる。（昭和48年4月7日、吉岡勲・日置弥三郎両氏の調査による。）社殿は天文3年に再建（古文書「桐洞手鏡」による）の記録がある。「神明帳」武儀郡の部に、正五位下須波大神の名があり、これが当須波神社であると思われることから、これまで諏訪大明神と言っていたのを、明治9年11月岐阜県の御沙汰により、今の名に改められた。この「神明帳」と言うのは、『延喜式神明帳』のことで、「延喜」とは人皇第六十代醍醐天皇の御代の年号を言い、その元年は西暦901年に当たる。また、『延喜式神明帳』は三代格式の一つで、佐大臣藤原時平らの撰したもので、20余年を要して、延喜5年に完成している。このときに出来た神明帳に名が記載されたとなると、当神社は恐らくそれより、100年ないし200年前に創建されたものと推測される古社である。本殿及び幣殿・渡殿は、明治29年に七宗御料林の檜材の特別払下を受けて改築し、今日に至ったものである。昭和56年3月主要地方道関金山線の改良工事により本殿を前方へ6尺移動、渡殿を六尺短くした。なお、この際、建物の修理及び玉垣・燈籠その他の改良工事も行なった。 岐阜県下呂市金山町菅田桐洞 697 番地

## ■上賀茂神社須波神社

上賀茂神社須波神社は、片山御子神社南側の高台に祀られている上賀茂神社の境内摂社です。須波神社は起源が明確ではないが、平安時代中期の「延喜式神名帳」に「山城国愛宕郡 須波神社」と記され、平安時代中期には既に祀られていたとも言われています。江戸時代後期の国学者・伴信友が式内社に比定し、1877年（明治10年）に内務省が末社・諏訪社を境内摂社に指定し、須波神社に社名を改めたと言われています。須波神社はかつて長野・諏訪大社と同じ建御名方神を祭神として祀っていたが、現在は阿須波神・波比祇神・生井神・福井神・綱長井神を祀っています。

諏訪大社は上社の本宮・前宮、下社の春宮・秋宮の二社四宮から構成されています。諏訪大社は起源が明確ではないが、日本最古の神社のひとつに数えられます。日本最古の正史「日本書紀」に飛鳥時代後期の691年（持統天皇5年）8月に「信濃須波」の神を祀ることが記され、飛鳥時代後期に祀られたとも言われています。御柱祭は平安時代以前から行われているとも言われています。平安時代前期の歴史書「日本三代実録」に「建御名方富命神社」と記され、平安時代中期の「延喜式神名帳」に「信濃国諏訪郡 南方刀美神社二座 名神大」と記され、名神大社に列しました。諏訪大社は上社・下社ともに建御名方神・八坂刀売神を祀っています。なお諏訪大社は信濃國一之宮として信仰されました。

※サイト京都ガイド/上賀茂神社須波神社より抜粋

京都府京都市北区上賀茂本山339

●下呂市の須波神社は、主祭神が建御名方命 事代主命である。元々諏訪大明神「おすわさま お須波様」と呼んでいたのを、延喜式に須波大神の名があり明治9年から須波神社と改称している。上賀茂神社の須波神社は、かつて長野・諏訪大社と同じ建御名方神を祭神として祀っていたとある。やはり、須波神＝諏訪神で良いのではないだろうか。

●出雲口伝による諏訪大社の成り立ちについて下記である。ぜひ読んでみていただきたい。

### ■出雲口伝による諏訪大社

古志の国（越後国）の翡翠の女神 沼川姫は、出雲王国 8 代副王 事代主命に嫁ぎ、出雲国美保の関に住んだ。事代主命が徐福に洞窟に幽閉されて亡くなった後、沼川姫は、御廬（みいほ）を建て事代主の喪に服した。その御廬の発音が変化して、その地は「美保」と呼ばれるようになった。

その後、沼川姫は古志の国の実家に帰ることにした。息子の建御名方命も一緒に移った。娘の美保須須美は出雲美保関に残り、父事代主命を祀った。のちに、そこに美保神社が建てられ、事代主神と三穂津姫命（美保須須美）が祀られた。

沼川姫は古志の国で亡くなった。糸魚川沼川郷には、奴奈川神社の名が延喜式の神名帳に記されている。糸魚川市の天津神社境内には奴奈川神社があり、沼川姫の御神像がある。

息子の建御名方命は中部地方に新しい王国を建設しようと思い立ち、そこで多くの家来を集め姫川を逆上りまず長野県上田市の下之郷に移り住んだ。そこで幸の神を祀った。その地には、後に生島足島神社が建てられた。その後黒曜石の産地だった和田峠を越えて諏訪盆地に進出した。諏訪湖の南岸に住みつき王国を作った。その時以来、彼の子孫は江戸時代までこの地の豪族として栄えた。

現在諏訪大社で祀られているのが建御名方命こと出雲王国 8 代福王 事代主神の神子・建御名方富彦。諏訪大社の祭神は諏訪を開いた富家の王子だった。建御名方富彦とは、記紀神話では国譲りで武甕御雷神に負けて諏訪に逃げた建御名方神として描かれているが、時系列では建御名方富彦が出雲を離れたタイミングでは国譲りはおろか大和政権すら発足していなかった。

諏訪大社本殿のまわりの四隅には高い柱の御柱が 4 本建てられているが、それは三内丸山遺跡に建っていた 6 本柱の伝説が少し形を変えて神社のまわりに残ったものと伝わる。

農耕民族であった出雲族は、春分大祭と秋分大祭を重んじた。絡み合う二本の太い縄は蛇を表し子孫繁栄を願う。二つの白い紙垂はオス蛇の種水を、三つの房は生まれた子供を表すと言われる。諏訪大社は春宮と秋宮では季節ごとに祭神が宮を移動し、春祭りや秋祭りで祭りの場所も移動する。この時、幸神（さいのかみ）のクナトの夫婦神は舟形の山車に載せられて遷宮する。舟が社に着くとその人形は焼かれ神霊は天に昇ると言われる。

建御名方の足跡は、神社の名称にも残っている。平安時代の『日本三代実録』には、諏訪大社のことを建御名方富命神社と書いている。

●建御名方が諏訪に祀った神は幸神（さいのかみ）だった。幸神とは出雲三神のことで、クナトノ大神・幸姫命夫婦と子供の猿田彦神、さらに龍神も加わる。やはり、須波神が信州で諏訪神となったのではないだろうか。そして須波神とは消された幸神（さいのかみ）三神のことだろうか。

●以下、阿須波神についての記述も参考にしてみた。

### ■阿須波神（あすはのかみ）

大年神の系譜中に見える。大年神が天知迦流美豆比売を娶って生んだ神々（奥津日子神・奥津比売命・大山咋神・庭津日神・阿須波神・波比岐神・香山戸臣神・羽山戸神・庭高津日神・大土神）の内の一神。諸説）

大年神の系譜中の神々については、農耕や土地にまつわる神を中心としたものと捉えられ、民間信仰に

基づく神々とする説や、大国主神の支配する時間・空間の神格化とする説がある。渡来系の神々が含まれているところには、渡来系氏族の秦氏の関わりが指摘されている。また、この系譜の、須佐之男命・大国主神の系譜から接続される本文上の位置に不自然さが指摘されており、その成立や構造について、秦氏の関与や編纂者の政治的意図が論じられている。一方、『古事記』全体の構成からこの位置に必然性を認める説もある。

阿須波神は、屋敷の神や庭の神と捉えられることが多い。「足磐（あしいは）」の約「あしは」が転じて「あすは」になったと捉えて、足場の意とする説や、家屋の基礎が堅固である意とする説、また、『万葉集』に「庭中の 阿須波の神に 小柴さし 我は斎はむ 帰り来までに」（20・4350）という例が見えることから、庭に小柴を立てて降神する神籬祭祀の神であり、旅の安全を守る神として信仰されていたとする説がある。また、越前国に足羽郡があり、同郡に「足羽神社」（『延喜式』神名帳）があり、郷名に足羽郷（『和名類聚抄』二十卷本）が見える。このことから、元来は現在の福井県福井市足羽地域の土着の神で、葦葉の神、あるいは、土の神であるとする説や、元来は同地に居住した足羽氏の奉斎した氏神であったが、同氏が衰退して司祭権が渡来系氏族に移り、大年神系譜の記載に至ったとする説もある。

また、『延喜式』踐祚大嘗祭・抜穂条に、悠紀田・主基田の斎院に祭る神八座として、『古事記』で兄弟神とされている「庭高日神」「阿須波神」「波比伎神」も挙がっており、これらと一連の、斎院の敷地に関わるであろうとする見解もある。 ※国学院大学神名データベースより抜粋

※このほか神棚の株式会社カネタの阿須波神（あすはのかみ）に関する総合研究記事もさまざまな見解が示してあり興味深い。

●阿須波神が大年神の子とされている。出雲口伝では幸神（さいのかみ）のことを大歳神と呼んでいた。幸神すなわち出雲三神の父クナトノ大神と母幸姫命の子は「猿田彦命」ということになる。

ラインがぶつかった島根県出雲市の「田中神社（波須波社）」の住所は出雲市佐田町吉野324。猿田彦命を祀る佐太神社と同じで、佐田町の由来もきっと猿田町という意味だったのではないか。

なにより田中神社の祭神は猿田彦命と天穂日子命である。天穂日子命は、出雲口伝では渡来系ホピ族で出雲族が追われたのちに出雲大社を受け継いだ一族。猿田彦を祀っていた神社に、後に天穂日子命を勧請したのだろう。田中神社は京都の吉田神社から勧請した説がある。

●単純に須波神に親しみをこめて呼ぶときにつける接頭語「阿」が「波」になったのではないだろうか。

●諏訪大社は三代実録では「建御名方富命神社」だったものを、のちに大和朝廷により諏訪大社と変えられ、記紀にもとづき祭神から猿田彦神やクナト・幸姫の三神は失くされ、龍神と諏訪を開いた建御名方とその父の事代主神だけが残ったと考えられる。

●まっすぐな祭祀線上に同じ神様が並ぶことはない。出雲口伝ではヘビのトグロに似た円錐状の山をクナトノ大神が宿る神名備山と呼び、丸い形の山は、妊娠した女性の腹の形で幸姫命が宿る女神山とされた。大朝日岳の先は尖ったピラミダルな形なのでクナトノ大神の山だったのかもしれない。大沼は水なので幸姫命と考えると、その先の田中神社には息子の猿田彦を祀ったのかもしれない。しかし、大朝日岳と違う神になってしまう。須波は広く幸神（三神+龍神）のことを呼んでいたのだろうか。

●いずれにせよ、田中神社（波須波社）の祭祀線が出雲の古い神社仏閣とつながっているかどうかを調べれば、なにか裏付けがきつと見えてくると思う。まずは出雲大社から調べてみる。

## 出雲大社



■出雲大社本殿 ←←←24.855km ←←← 田中神社本殿 →→→ 24.855km→→→ 三澤神社本殿  
 天満宮（出雲大社境内社）←←24.855km ←←←



## ■出雲大社

出雲大社はいわゆる神話における国譲りの事情のもとで創建された神社である。867年（貞観9年）には正二位に叙せられ熊野大社とは別に出雲国一宮と称せられるようになった。中世には12郷7浦を領したが、豊臣秀吉により減じられ5郷2浦となった。1871年（明治4年）に官幣大社に列格の後、大正時代に勅祭社となった。島根県出雲市大社町杵築東195

## ■天満宮（出雲大社の境内社）

学問の神様・天満宮は、出雲大社にもあります。そのわけは、菅原道真は、出雲国造家の第十二世・出雲国造氏祖命（うじそのみこと）の第二の御子・野見宿禰（のみのすくね）の末裔と伝えられています。そのことから、菅原道真（菅原家）と、出雲国造家は深い繋がりがあります。

## ■三澤神社

祭神/阿遅須枳高日子根命 アジスキタカヒコネ

三澤神社の創立年代は明らかではありませんが、出雲国風土記に弍澤社として、仁多郡にある神祇官社の首位に記録されている。御祭神阿遅須枳高日子根命も出雲国風土記、仁多郡三澤郷の伝承により祀られている。そして延貴式神名帳には三澤神社とし室町時代の頃からは大森大明神社と呼ばれ明治維新後は三澤神社に復称された。明治4年社格郷社に列せられ式内郷社三澤社となり、終戦後社格は廃止されたが昭和56年島根県神社庁より特別神社の指定を受けている。このように当社は古くから崇敬され続け今日に至っている。島根県仁多郡奥出雲町三沢402番地

●期待どおり出雲大社とつながった。これは重要な祭祀線といえる。なぜなら、三澤神社の祭神はアジスキタカヒコネである。しかも出雲風土記に仁多郡の首位の神社と表されている。出雲口伝によると、出雲王国の主王（役職名は大名持）大国主命は、出雲族の分家で由緒ある宗像家三女神のタキツ姫と結婚しアジスキタカヒコネと高照姫を生んでいる。記紀では大国主命の子は事代主と偽っている。この三角祭祀線は本当の親子のつながりと言える。

●社殿の向きを見ていただきたい。出雲大社は南向きではあるが、わずかに東に傾けて建てられている。本殿と拝殿屋根の棟がきちんと田中神社の方を向いている。どこかもっと神聖な場所に繋がっているのかもとラインを前後に伸ばしてみたが、ぶつかる神社仏閣はなかった。出雲大社はわざわざ田中神社に向けて建てられている。しかし、祀られている大国主は西を向いて鎮座している。天孫族により大朝日岳とつながらないようにされ、大国主神が力を持たないようにされたのではないか。



●次に、出雲大社とつながるほどの重要性が三澤神社にあるかどうかを調べるために、三澤神社の祭祀線をざっと探してみた。

# 三澤神社



■許豆神社（南宮） ←←←33.912km ←←← 三澤神社 →→→ 33.912km→→→ 佐太神社正中殿  
 →→→ 33.912km→→→ 宇賀神社

## ■佐太神社

御本殿三社に十二柱の神々を御祀りしていますが、主祭神 佐太大神は出雲国で最も尊いとされる四大神の内の一柱で猿田彦大神と御同神です。

当社は出雲國風土記に「カンナビヤマの麓に座す」佐太大神社(さだおおかみのやしろ)或いは佐太御子社 (さだみこのやしろ) と見え、延喜式(えんぎしき)には佐陀大社(九条家本)、また出雲國二宮と仰がれ、出雲國三大社の一つとして杵築(きずき=出雲大社)、熊野、鎌倉時代においても杵築、日御崎とともに「佐陀大社」と称えられた御社です。



中世には伊弉冉尊(いざなみのみこと)の陵墓である比婆山(ひばやま)の神陵を遷し祀った社と伝え

旧暦十月は母神である伊弉冉尊を偲んで八百万の神々が当社にお集まりになり、この祭りに関わる様々な神事が執り行われることから当社を「神在の社」（かみありのやしろ）とも云い広く信仰を集めています。盛時には神領7千貫・神職224人を有し、年間七十余度祭禮が行われていたと云いますが、太閤検地で領地を減じられ神職75人となったと云われています。

江戸時代を通じて出雲國10郡のうち佐陀触下（さだふれした）と呼ぶ秋鹿（あいか）・島根（しまね）・楯縫（たてぬい）・意宇（おう）西半の3郡半の神社を支配下に置き、歴代藩主の信仰も厚く、出雲國內でも重要な地位を占めてきました。

また、旧暦8月24日・25日の御座替祭（ござがえさい）にはこの佐陀触下の神職・巫女が参集奉仕する慣わしで、この祭で舞われる神事舞が出雲國內をはじめ他の里神楽に大きな影響を与えたとされ「出雲神楽の源流」とも云われています。

明治3年、神社制度の改革が行われこの触下制度は廃止となります。51社あった末社もそれぞれが村々の氏神として独立し20ばかりとなり、神領、神職とも大幅に減じ著しく衰退しました。しかし、佐陀宮内の氏子はじめ神領6ヶ村の旧氏子、その他多くの崇敬者による復興運動により、昭和3年国幣小社に列せられました。

戦後は佐陀宮内地区の氏神社となっていますがその由緒・歴史から近郷諸所の惣氏神としてはもとより全国各地から広く信仰を集めています。

様々な歴史的困難にもかかわらず、本殿三社をはじめ、国・県の指定文化財も多数有し、古伝の祭祀を守り受け伝えている点において神道学、民俗学等の面からも注目を置かれているところであります。

島根県松江市鹿島町佐陀宮内73-73 ※佐太神社公式サイトより抜粋

### ■許豆神社（南宮）/南大宮許豆神社

許豆神社〈南宮〉（こづじんじゃ）は『出雲國風土記733 AD.』楯縫郡に所載の神祇官社「同社〈許豆社〉（おなじき）やしろ」『延喜式神名帳927 AD.』所載の社「許豆神社 ことのかみのやしろ」とされていますもと村社。通称南の宮。主祭神は、志那津毘古命、志那津毘売命。二神は、伊弉諾命、伊弉册命の子神で夫婦神。ともに風の神。



明治24年の由緒書出によると、国引きのとき八束水臣津野命の大業を授けられたので、去豆の折絶（こづのおりたえ）の地に祀ったという。『出雲國風土記』に許豆五社が載っているが、当社はこのうちの官社許豆社に比定され、「延喜式」神名張の許豆社とされる。

『雲陽誌』によれば、江戸時代には、大宮神社と呼ばれ、慶長5年（1600年）修造の棟札が残っているという。明治5年旧社名に復した。

出雲市役所「いずもな暮らし」より

【祭神は、風を司らせ、航海を守護し給う神であり、国引きの時、「八束水臣豆奴命」の大業を助け給いしにより、古津の打絶の地に祀る】と、明治二十四年（1891）「由緒書出」に言う。

大正十五年（1926）十月、幣帛供進指定社となる。

※サイト Shrine-heritager 実践和學より抜粋

島根県出雲市小津町92

■宇賀神社 詳細不明 安来市宇賀荘町 42 番地

●田中神社の猿田彦神と関係あるのではないかと佐太神社につないでみた。すると、出雲神話の国引きの時に助けたという志那津毘古命、志那津毘売命を祀る許豆神社（南宮）にぶつかった。出雲風土記にも載り式内社でもある。三澤神社は、佐田町の猿田彦神と松江の佐太神社の猿田彦神とつながっている。宇賀神社も古い由緒があったのではないだろうか。

●もう一つ、出雲族らしい磐座とのつながりが見つかった。



■佐太神社北殿 ←←33.925km ←← 三澤神社 →→ 33.925km →→ 生馬神社 (大岩大明神)磐座

●大岩大明神の本殿ではなく本殿裏の大岩とつながった。佐太神社北殿は「佐太神社 潮草（藻汐祓）」と表示されている。これは潮草（しおくさ）という神社の参拝方法で、海で禊をしてから海藻（ホンダワラ）・海水（竹筒に汲む）を持ち、神社に参拝するもの。大岩大明神を紹介するブログにも竹筒や海藻がぶら下がっていた。

●三澤神社の祭祀線はきっと他にもたくさんあると思われるが、古代において重要な神社なことがわかったので割愛した。その三澤神社と波須波神社はつながっている。

●出雲口伝によると、出雲王国は、西出雲王家（神門臣家）と東出雲王家（富家）で成り立ち、それぞれの王が、主王（大名持）と副王（少名彦）を務めたとある。八代目時は、神門臣家の大国主が主王、富家の事代主が副王を務めた。年上の王が主王になった。長髓彦（大彦）の子孫の阿部、安藤、佐々木、布施、松浦家などの始祖にあたる事代主命の富家の「東出雲王国」とつないでみた。出雲口伝によると、その東出雲王国の宮殿が現在の「神魂神社」とされている。はたして田中神社につながっているだろうか。



●ざっと調べたらつながりが見つからず落胆したが、もう一度ズームして探してみたら神魂神社の近くに「雨乞池」が見つかった。大沼浮島の雨請壇も祭祀線がつながるポイントになっているから、見逃せない。



■神魂神社 ←←44.2km 位 ←← 田中神社（波須波社）本殿 →→ 44.2km 位 →→ 雨乞池

●ただ、近くに大きな溜池が作られたせいか、現在は小さな池になっていて場所が特定できない。44.2kmあたりで同距離となる。仕方ないのでコツコツ探してみることにした。

## ■神魂神社

主祭神: 伊弉册大神 (いざなみのおおかみ) 合祀神: 伊弉諾大神 (いざなぎのおおかみ)

社伝によれば、出雲国造の大祖・天穗日命がこの地に天降って創建したと伝わるが、『延喜式神名帳』、国史や『出雲国風土記』に当社が出現しない。その理由として、出雲国造家が、自らの祖神を大庭にあった邸内で私的に祀り祭祀を行ったていた、または邸内に祀っていた社が起源であった可能性が強く、そのため文献に記載がなかったと考えられる。やがて現在地に勧請され、近隣住民の信仰を集める形となったと考えられている。文献における初見は承元2年(1208年)の鎌倉將軍家下文であり、実際の創建は平安時代中期頃とみられている。

神魂神社のある大庭(おおば)は、出雲の国分寺、国府に近く古代出雲の政治、交通、経済の中心地であり、天穗日命の子孫の出雲国造が住んだと伝わり、出雲国造は出雲大社の宮司家となるが、出雲国造として25代まで当社に奉仕していた。延暦17年(798年)以降、郡司兼務を禁じられ、大庭に別邸を残したまま、現・出雲大社のある杵築(きつき)に居を移すが、出雲国造家の代替わりのときに行われる「神火相続式(おひちぎしき)」、「古伝新嘗祭」の祭祀は、明治初年まで当社に参向して行われており、また大庭の別邸も明治初年まで神魂神社の社頭近くに存在していた。

●出雲口伝が伝える神魂神社については下記です。ぜひ読んでみてください。

### ■出雲王国の最期

紀元前6世紀から700年以上にわたる日本最古の王国の終焉。あいつぐ勢力争いで、防衛とはいえ、武力で戦うことを避けることはできなかった。紀元前3世紀の徐福の渡来にはじまり、ヒボコ勢力からの圧力。親戚でもある吉備王国の裏切りと敗戦。王国の分裂。そして物部東征による両王国の滅亡へ。それは記紀に記される「出雲の国譲り」ではなく、激戦の果ての占領統治だった。

東出雲王国の王宮へは物部十千根が攻め込もうとしていた。伯耆国日野郡印賀の方面から熊野系(紀伊)物部が攻め込み能義郡伯太村で激戦となった。物部軍の数は圧倒的に多く、出雲軍は防戦をあきらめた。最後の東出雲王(17代目少名彦)の大田彦は、軍の解散を宣言。ホビ家のカラヒサに敗戦処理を任せ、親族と共に王宮(神魂神社)から逃げ、南の熊野(松江市八雲町)に隠れた。

神魂の王宮ではカラヒサが王の代理として物部十千根と講和条約を締結。広域出雲王国の支配権を物部政権が受け継ぐこと、そして王宮を進駐軍司令官・物部十千根が使うことに。これにより、東出雲王国は滅亡した。王宮の奥部屋には物部の神、熊野速玉ノ神(饒速日)が祀られた。

物部十千根の子孫はのちに秋上家を名乗った。秋上家は神社横に住居を建て熊野速玉ノ神をそちらに移した。王宮から神社に代わり物部によりイザナギとイザナミが誕生した。イザナギとイザナミの元は出雲族の幸神(さいのかみ)信仰である。

八雲地方の熊野に移った富家は、館を構え、邸内にクナト神社を建て、クナト大神と事代主命を祭った。のちに社は大きくなり熊野大社となった。秋上家が旧王宮を神魂神社としたことに富家は感謝した。

熊野大社の本殿横に鑽火殿が建っている。鑽火殿は熊野山からの御神霊遷座を示すために火切神事が行われた場で、檜の白と卯の木の杵で聖なる火が起こされた。その火で炊いたご飯を一生食べる者が出雲王

の代理者とされ、霊統を継ぐ象徴となった。この火継ぎ神事をホヒ家の子孫が担うことで出雲国の代表として財筋に認められたとされる。

ホヒ家は秦のいわゆる斉国から渡来した徐福の先遣隊として日本に上陸し、出雲王国にとりいって通訳や技術伝承を担った一族で、のちに火継ぎ神事を通じて、出雲王の霊統を継ぐ国造家（くにのみやつこけ）となった。天の穂日を祖とし青銅器や機織り技術をもたらした彼らは霊的、政治的な正統性を財筋によって認められ、出雲の代表的家系として神事と統治に深く関わるようになった。

現在の出雲大社の社家は千家家と北島家の二家为中心でホヒ家の流れをくむ。火を継ぐ者は金ではなく祈りを継ぐ。出雲王家は赦した。この神事は、最初は熊野大社で行われた。不思議なやりとりが繰り返される。出雲大社から四角い角餅を持ってきた国造に対し熊野大社の亀大夫が「餅が小さい、形が悪い」などと難癖をつける。国造はただただ黙って頭を下げるだけ、これは財筋がホヒ家を牽制する体制を儀式化し忘れないようにしたものようだ。熊野大社の宮司職は富家当主の弟が熊野家を名乗るようになった。

※IRISの神社 YELL より抜粋

●雨乞池の神事はどこへ向かってやっていたのか。神魂神社を照準にして雨乞池からのラインを伸ばしてみた。

●すると…



●佐太神社本殿とつながっていた!

東出雲王国の宮殿（神魂神社）は、ニヶ所の猿田彦神とつながっていた。

ということは、雨乞池の祭祀ポイントもこのオレンジ色の線上にあるということになる。

●しかし、田中神社と神魂神社本殿との距離 44.196km で円周ラインを描くと6mほどずれてしまう。

●佐太神社へ向かうライン上の三角の木陰のポイント（白矢印）が気になったので円周ラインを置いてみた。そして神魂神社を見てみた。すると、本殿脇の貴布祢稲荷両神社にぶつかった。しかし、稲荷神社の始まりは和銅4年（711）。またまたがっかりしてしまった。ところが、貴布祢稲荷両神社の説明を読んで思わず声を上げてしまった。



■ 貴布祢稲荷両神社 ←←44.187km ←← 田中神社（波須波社） →→ 44.187km →→ 雨乞池

■ 貴布祢稲荷両神社

貴布祢神社と稲荷神社が一つになった「一棟二社」は非常に珍しく、重要文化財に指定されている。

貴布祢社祭神：闇竈神

稲荷社祭神：倉稲魂神

※日宝綜合製本 【神魂神社】の見所と御朱印を完全ガイド！神々の森に佇む国宝社殿は必見！より抜粋

●稲荷神社と貴布祢神社の社だった。そして貴布祢神社の祭神は「闇竈神」すなわち龍神!

龍神は出雲族の幸の神信仰（クナト神・幸姫命・猿田彦神+龍神）に含まれる神である。雨乞池の神事は田中神社を通して龍山大朝日岳の神気を呼び寄せて行われていたのではないだろうか。

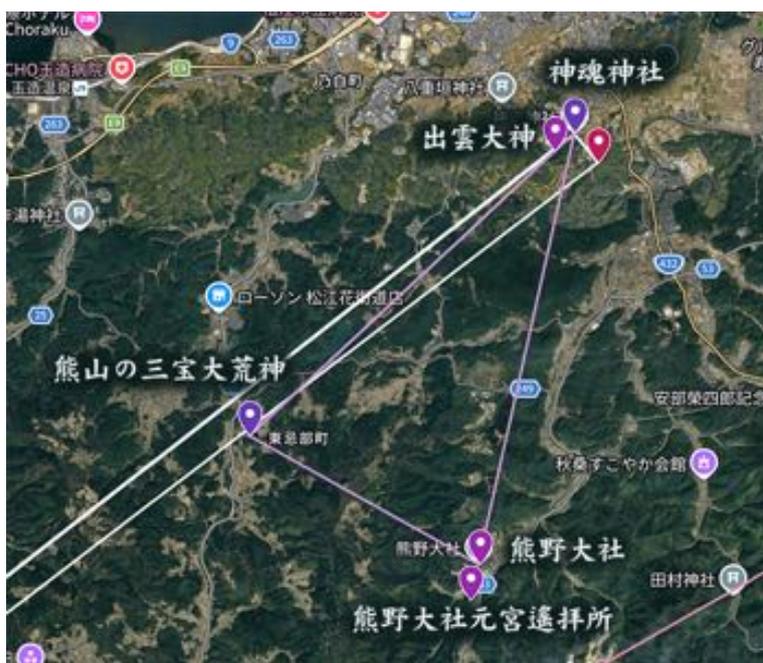
●もしかしたら王宮時代に東出雲王の富家が守り神として宮殿脇に祀っていた幸の神（さいのかみ）社だったのではないだろうか。秋上家になり、三神（クナト・幸・猿田彦）は消され龍神だけが残された…



● 貴布禰稻荷両神社の二つ隣の小さな境内社に、その消された幸の神を見つけた。出雲口伝では、クナト・幸・猿田彦の幸神三神は三宝荒神になったと伝えている。荒神は素戔嗚ではない。幸神=荒神になったのである。



● 富家が物部から逃れて移った熊野大社の祭祀線も探してみた。



■ 熊山の三宝大荒神 ←← 5.939km ←← 神魂神社 →→ 5.939km →→ 熊野大社



## ■熊野大社

祭神/伊邪那伎日真名子 加夫呂伎熊野大神 櫛御氣野命

火の発祥の神社として「日本火出初之社」（ひのもとひでぞめのやしろ）とも呼ばれ、出雲大社と共に出雲国一宮である。出雲国造本来の奉斎社であり、意宇六社の一つに数えられている。

紀伊国の熊野三山（熊野国造奉斎社）も有名だが、熊野大社から紀伊国に勧請されたという説と、全くの別系統とする説がある。社伝では熊野村の住人が紀伊国に移住したときに分霊を勧請したのが熊野本宮大社の元であるとしている。和歌山県御坊市の熊野神社の伝記には「往古出雲民族が紀伊に植民する際にその祖神の分霊を出雲の熊野より紀伊の新熊野に勧請する途中、「当地に熊野神が一時留まりませる」ということが社由緒」となっている。

祭神名の「伊邪那伎日真名子（いざなぎのひまなご）」は「イザナギが可愛がる御子」の意、「加夫呂伎（かぶろぎ）」は「神聖な祖神」の意としている。「熊野大神（くまののおおかみ）」は鎮座地名・社名に大神をつけたものであり、実際の神名は「櫛御氣野命（くしみけぬのみこと）」ということになる。「クシ」は「奇」、「ミケ」は「御食」の意で、食物神と解する説が通説である。

島根県松江市八雲町熊野 2451 番 ※Wikipedia

## ■熊山の三宝大荒神

「従来古木蒼然たる森林中に神木ありて之を祀りしも明治廿五年花崗岩の碑石となし玉垣を造り、更に其後の森林を伐採して境内を拡張し現況となす。」（忌部村誌）

「大川端地区と熊山地区に鎮座する三寶大荒神 両荒神とも素盞鳴尊を祀る。創立は 1000 年以上も前と伝える。33 年目ごとに行われる式年の荒神神楽があり、17 時間に及ぶ夜を徹しての神楽である。大川端は 2014 年に第 43 回目、熊山は 2020 年 4 月に第 44 回目を数える。言い伝えによる



と、神代の昔、天照大神が天の岩屋戸お隠れになったとき、天照大神のお出ましを願うため、天宇豆売命が舞を舞うことになったが、そのときの琴・太鼓の革は両地区の牛の皮を用いたとされている。」（忌部公民館パンフレット） 主祭神：素盞鳴尊 松江市東忌部町熊山 ※松江の神社サイトより抜粋  
※社殿がないため、グーグルマップのマーカ―は社務所らしき建物に付けられているようだ。その隣の位置にあたるので間違いはないと思われる。

●神魂神社を頂角にして「熊野大社」と「熊山の三宝大荒神」ときれいな二等辺三角形でつながった。出雲口伝では、熊野大社は、最後の東出雲王（17 代目少名彦）の大田彦が、物部勢との戦いに敗れ、親族と共に王宮（神魂神社）から逃げ、南の熊野（松江市八雲町）に隠れ、館を構え、邸内にクナト神社を建て、クナト大神と事代主命を祭ったのがはじまり。のちに社は大きくなり熊野大社となったとある。熊山の三宝大荒神は祭神を素盞鳴尊になっているが、前述のとおり天孫族の支配により消された出雲三神のこと。

●そして三角形の両方の辺そのものが大切な祭祀線となっている。一つは

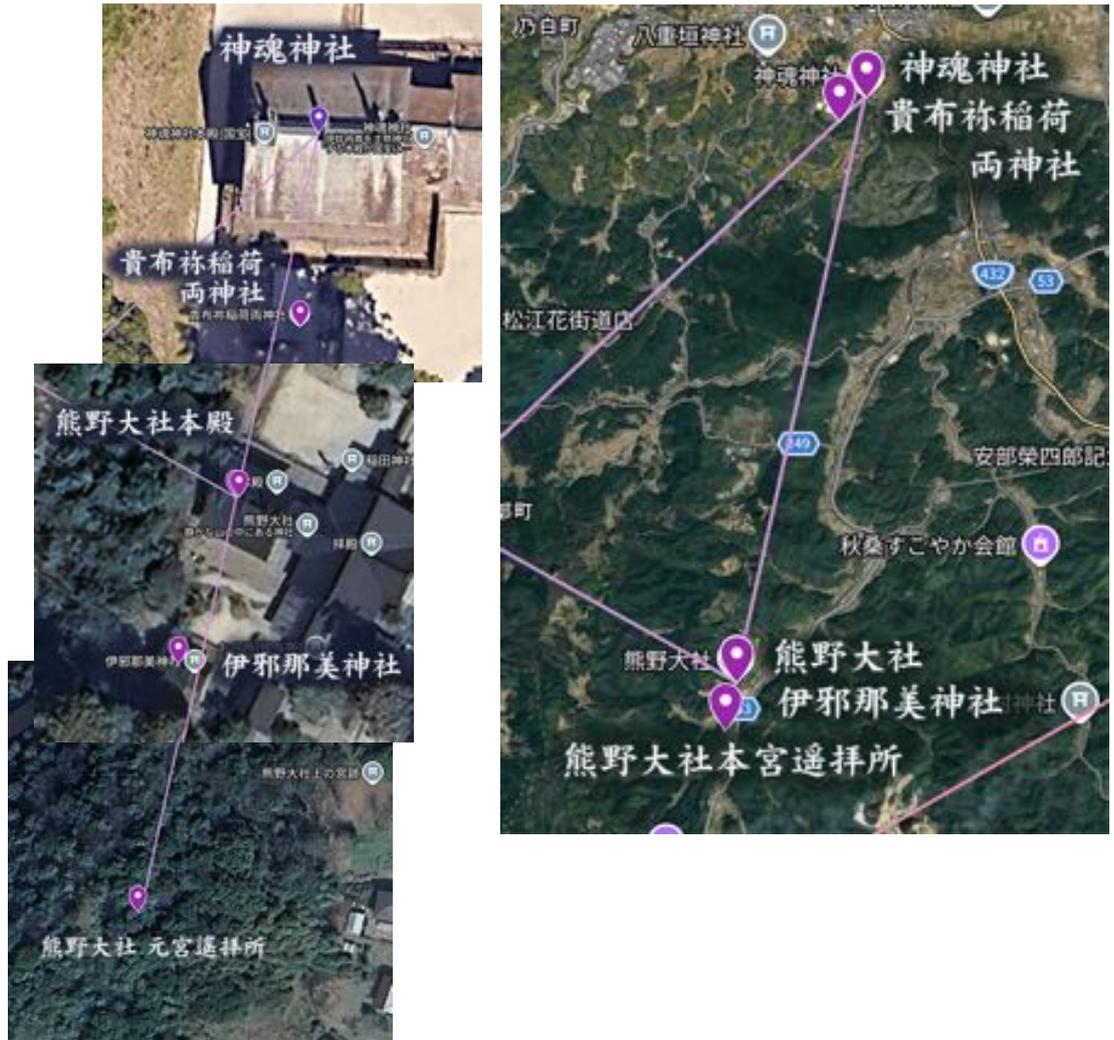
■熊山の三宝大荒神 →→→ 出雲大神 →→→ 神魂神社



### ■出雲大神宮

出雲口伝によると、ここは東出雲王家の墓で、亡くなった出雲王の数だけ大きな石が置いてあるとのこと。王宮（神魂神社）のすぐ近くに墓所があったということになる。グーグルマップのマーカはアバウトだが、熊山の三宝大荒神（出雲三神）では毎年の例祭に加え 33 年に一度神楽を奉納する大きな祭りが行われている。おそらく出雲王たちの供養の目的ではないだろうか。出雲に荒神はたくさんあるが、そのようなことをしているのはこの熊山と、近くの川端の荒神だけらしい。

●それでもう一つは



■神魂神社→→貴布祢稲荷両神社→→熊野大社本殿→→伊弉那美神社→→熊野大社元宮遙拝所  
(もしくは祓所の磐座)

●熊野大社を経て、正確な位置はわからないが熊野大社本宮遙拝所もしくは近くにある巨大磐座とつながっているようだ。

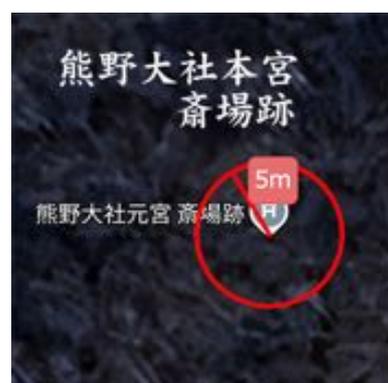
### ■熊野大社元宮遙拝所

古来、熊野大社は熊野山にあったが、中世に里に下りて「上の宮」「下の宮」の二社体制となった。明治時代になり「上の宮」は現在の熊野大社である「下の宮」に奉遷合祀された。上の宮跡近くの山の遙拝所から見える正面の熊野山（現天狗山610m）の山頂のやや下に大きな岩があり、元々それが熊野大社であったとされている。

●せっかくなので熊野山山頂の熊野大社元宮とのつながりも確認してみた。



●天狗山（熊野山）山頂から少し下りた所に熊野大社本宮齋場跡の  
 マーカーがあったのでそこにコンパスの起点を置いてみた。  
 すると上の宮跡と元宮遙拝所のあたりが同距離となった。  
 地形図で見ると山の頂付近にあたるので間違いのないと思われる。  
 これは、ご神気を引くための祭祀線である。



■熊野大社元宮遙拝所←←3.403km←←熊野大社元宮齋場跡→→3.403km→→熊野大社上の宮跡

●実にシステムチックな東出雲王国の祭祀線がわかった。本宮遙拝所で祭祀することにより、上の宮に熊野山のご神気を引き込んでいる。そして同時に熊野大社（旧下の宮）の祭祀により神魂神社（東出雲王宮）に神気は送り込まれる。



祓所の大岩



元宮遙拝所

※写真はサイト「ガリバー旅行記」熊野大社元宮遙拝所より抜粋



まとめ

●大朝日岳・大沼の神気を引く田中神社（波須波社）が出雲において、大朝日岳・大沼の神気を配る役割を果たしていることがわかった。

そして田中神社の須波が朝日岳の須波神と同じ意味を持つことは確かだと思う。確信は持てないが、元々はどちらも同じ幸神信仰だったことを考えると、須波が諏訪になったとは十分に考えられると思う。

733 年に書かれた『出雲國風土記』所載の神門郡 不在神祇官社「波須波社（はずは）のやしろ」の論社

も田中神社でまちがないだろう。

大朝日岳・大沼と出雲はたしかにつながっていた。

田中神社とつながる祭祀線は他にもあるだろうから、また見つけたら追記することにして、ひとまずはこれで終わりとする。

2026. 3. 20 春分の日 竜天太陽 記